長崎華僑と黄檗宗の儀軌に則った崇福寺の普度（盂蘭盆会　旧暦 7 月下旬）

長崎大学多文化社会学部教授・王維

長崎は日本華僑の発祥地であるが、現在、老華僑の数が少なく、福建省福州（福清）地域の出身者がその 90%以上を占めている。長崎華僑の来日は（当時は唐人と呼ばれる）唐人貿易時代に遡ることができる。いわゆる「鎖国」時代、唐船貿易によって日本を含む東・東南アジアにおける広域貿易ネットワークが作られた。1620 年代、長崎では福建・三江出身の唐船主によって三つの唐寺が建立された。唐三カ寺と聖福寺を合わせて四福寺と呼ばれているが、いずれの寺院も黄檗宗の末寺となっており、中国文化の影響を強く受けている。唐寺は祭祀、文化、親睦などの役割を果たす一方、在留唐人の祭祀・文化を生み出す空間であり、華僑社会と地域社会を密接につなげるための関係の「場」でもあった。黄檗宗とのつながりは、1654 年に長崎在住唐人の招きに応じて来崎した隠元禅師が唐寺を教化していったことに始まる。翌年には幕府より京都宇治に寺地を与えられ、故国の寺を真似た伽藍を建立して黄檗宗を広めた。黄檗宗の儀軌にのっとって各唐寺で行われてきた盆行事「普度」（盂蘭盆会）は、現在長崎では、福州系華僑が担い手となり、崇福寺においてのみを行っている。

普度の由来

普度は古来より、中国人の間でたいへん重視されている行事で、非業の死を遂げ、後嗣が途絶えた幽魂や鬼などを祭ることを目的としている。祭壇をつくり、仏僧、道士を招いて読経してもらう。昔は演劇を奉献するのが普通だったが、現在ではない。

普度は、仏教と道教の二教、すなわち仏教の盂蘭盆会と道教の中元節が混合して形成されたものである。「目連救母」の伝説が盂蘭盆会の由来とされるが、それによると、釈迦牟尼の弟子目連の母は生前に遊僧に食をあげず、死後餓鬼になってしまった。目連は仏陀に母の救いを求めたところ、七月十五日に五味山珍の食物を衆仏に供養すれば母を救えるという教示を得たことによって、盂蘭盆会がはじめられた。

道教では、中元の日が地獄の官が釈罪する日とされている。この日になると地獄の門が開かれ、衆幽魂、野鬼などが、地官とともに世間に降りてくるので、これに衣食を与え、供養を行い、このさまよえる魂を鎮撫することが中元節の由来であった。盂蘭盆会の当初は有縁仏だけを供養していたが、道教の説と結びつき、仏の恩恵と功徳をより広げるため、無縁仏も供養するようになった。

普度に関する慣習は、中国建国後に封建的迷信とされ、特に普度期間における飲酒による争い、各町の間に普度の規模をめぐる競争、そして普度期間の物価の上昇などが問題とされ、次第に当局により禁止令が出され、文化大革命の間は完全に禁止された。しかし、家の中では普度の日になると何らかの形で供養をしていたという。1980 年代以後は、普度の習俗が復活した。信仰に篤い福建省泉州地域では、旧暦 7 月に入ると、ほとんど毎日どこかで普度行事が行われている。現在は、道士を招いて読経し、演劇を奉納することなどは見られなくなったが、正月のように家族全員が揃い、祖先を祀った後、会食することが普度の一般的な形式となっている。

長崎の普度はすでに 400 年ほどの歴史をもっている。江戸時代に各唐寺において、7 月 13 日より 15 日の間に行われたが、後に各公所が設立されると福建会館でも普度行事を行うよ

うになり、期間は 7 月 26 日より 28 日の間とされた。現在に続いている崇福寺の普度も、1899 年に設立した三山公所の設立によって始まったというが、福建会館の伝統を継承したものとされる。福建会館のリーダーが泉漳幇であったので、普度は泉州地域の伝統も併せて踏襲した行事だと考えられる。（写真 1：普度期間中の崇福寺山門）

長崎普度のあらまし

普度は、華僑が輪番で行事を担当している。長崎では現在、老華僑数は 400 人弱だが、1990 年代までは、崇福寺の当番は毎年 8 戸の家長が当り、6 年に 1 回の輪番制になっていた。2000 年代の後半になると、華僑人口がさらに減少し、6 年ではなく、5 年、4 年さらに現在（2018 年）3 年に 1 回の輪番制になっている。輪番による行事は、旧暦の 1 月 15 日元宵祭を 1 年の始まりとし、旧暦 7 月 26 日からの普度を 1 年間の行事の終わりとする。

現在の崇福寺の輪番制は戦後の形式だと言われている。新地に設立後の三山公幇（三山公所）によって崇福寺の祭祀行事が営まれていたが、具体的には新地の比較的裕福な店舗が担ってきた。行事の費用は一部の寄付を除いて、ほとんどこれらの店が用意した。しかし、戦争により、それらの店主たちの多くが帰国するか、他の地域へ移住するなどしてほとんどいなくなり、戦時中、崇福寺の行事も中断した。戦後、三山公幇は崇福寺の行事を復興するため、毎年 10 戸前後で、6 年か 7 年ごとに当番になる、現在のような輪番制を導入した。

表 1：普度のプロセス

祭祀種別		日時	祭祀項目	祭祀項目内容
水懺供養	初日		招霊仏	住職（黄檗宗）が経（水懺経）をあげ、釈迦と諸尊を祀る。1日4回行われ、本堂から始り諸堂を1巡して本堂に戻る。亡者や鬼を呼ぶとされる。
	2日目		慰霊	初日と同じように4回誦経礼拝が行われる。亡者や鬼を慰霊する
	3日目		送霊仏	3回誦経礼拝。
施餓鬼		16時30分	精進明け	供物が昼から準備された生臭料理等に変えられ、大施餓鬼の終盤に入る。この時境内で獅子舞が披露される。
		19時	誦経礼拝	最後の誦経礼拝（満散施餓鬼一焔口経）が行われる。
		21時	満散施餓鬼	最後の読経のあと、全世界の鬼に対し供物を捧げ、金山銀山などを燃やし、饅頭を天に向けて投げて鬼を送る。金山銀山は金貨銀貨を意味し、鬼たちの1年間の小遣い銭となる。
	4日目	午前11時	振る舞い	供物が料理されて信者たちに振る舞われ、遠来の信者たちと一緒に会食する。食事のあと遠来の信者たちを送り出す。
	5日目	午前11時	補施（ポーゼ）	補施は不具者であるために普度の法会に遅れた亡霊の為に行うという。祭壇が護法堂と鐘鼓楼の間に設けられ、生臭料理、饅頭などが供えられる。住職の読経があり、当番一同焼香して、普度は幕を下ろす。

日本の一般の盂蘭盆会と違うのは、先祖の供養とともに、いわゆる施餓鬼の営みが重視さ

れていることである。祖先、無縁仏、神々や鬼に捧げるたくさんの供物のほか、死者に捧げる金山・銀山などの作り物が用意される。崇福寺の境内には、「普度棚」「神壇」「七爺・八爺」「五亭」「三十六軒堂」など特設の祭壇が設けられる。このうち、三十六軒堂は、中国の福州から送ってもらったものである。日本の華僑社会が祖国とのつながりを保ち続け、その影響を強く受けていることが、普度儀礼の一端にもうかがわれる。

行事は補施（普度の法会に遅れた不具者亡霊のために行う法要）を含め、5 日にわたって行われ、大施餓鬼の終盤に入ると、日本人観光客なども含め、大勢の人たちで賑わう。かつては、唐楽と呼ばれている「鼓板」や「加冠」などの曲を演奏したり、そのリズムに乗って踊る若者の姿がみられたが、今はその演奏を継ぐ人がいなくなってしまった。そのかわり、1995 年から華僑の若者より獅子舞が披露されるようになった（**写真 2:普度に登場する子どもの獅子舞**）。

崇福寺と普度の役割

崇福寺や祭祀の役割は、単に神や祖先を祭る儀礼であるだけではない。その役割として次の 3 点が挙げられる。①親族と同郷者の親睦である。同じ出身地の華僑が集まり、同胞と交流を深めた、情報交換の場としての役割を果していた。②普度は年間において一族が集り、墓参りや祖先祭祀、華僑という意識を感じさせる重要な祭祀であるが、1980 年代まで同郷者若者の出会いの場としての役割も果たし、姻戚ネットワークの形成に寄与していた、③伝統文化を継承するという文化的ネットワークとしての役割もあった。

しかし、崇福寺のこうした役割は 21 世紀に入ってから華僑の世代交代や日本社会への同一化などによって大きく変化したが、華僑にとって依然として重要な存在である。①福建華僑を繋がる社会的文化的な絆として、華僑の帰属意識を認識させる空間である。②伝統文化の継承や教育・活動の場としての役割がある。たとえ若い世代が祭祀に対して関心が薄れていったとしても、輪番制により当番になることによって、受動的であったとしても、結果として伝統の学習や継承、そして華僑同士の関係づくりにつながることになる。また、中国語ができず、日本人の子供と変わらない華僑の子弟にとって、獅子舞は華僑の文化を意識させるものである。獅子舞に参加することによって、若者同士の連帯感も生まれ、新たなネットワークの形成に寄与できる。③華僑社会だ

けではなく、地域社会との関係づくりにも役割を果たしている。現在、崇福寺とその祭祀は地域の文化資源として、観光振興と地域活性化に貢献している。長崎の観光イベントとしても知られている「さるく」のコースにも組まれている。それによって、普度も長崎の夏の観光イベントとして定着している。獅子舞も地域の子どもの参加を受け入れることによって、地域の人々と一緒に伝統文化を再編していく過程に、地域人との繋がり、華僑の子弟と地域の子供との繋がりが作りあげられ、それが同じ地域の一員としての連帯感とネットワークの再生に寄与している。

参考文献

王維（2001）『日本華僑社会における伝統の再編とエスニシティ』風響社
（2003）『素顔の中華街』洋泉社
曽士才・王維編著（2020）『日本華僑社会の歴史と文化』明石書店